

2014年
6月2日
月曜日

藤井英次 教授（国際金融論）

師と経済学は至る所に： ジャズ・カフェで機会費用を学ぶ

学生時代には家庭教師や塾講師、

店頭販売促進員、区役所下請けの街灯点検係など、様々なアルバイトを経験した。当時のことを少し振り返ってみたい。ジャズに夢中だった私は、好きな音楽を聴きながらバイト料が貰えるという甘い考えで、大音量でジャズを聴かせるカフェ（当時ジャズ喫茶と呼ばれた）でアルバイトを始めた。今では歴史的遺物となってしまったLPレコード、真空管アンプと大きなスピーカーでジャズを聴かせるような店がまだあちらこちらにあった頃の話だ。

働き始めると直ぐに自分の考えの甘さを思い知らされた。顧客への対応は勿論、食器洗い、ゴミ処理にトイレ掃除と仕事に追われ、音楽にじっくりと耳を傾けているような余裕などなかった。それでも多様なミュージシャンの個性的な演奏が鳴

り響く空間にいるのは幸せだった。

店で私が苦手とした仕事に瓶ビールを素早く業務用冷蔵庫に詰めるという作業があった。瓶の首を指の間に挟んで何本も同時に冷蔵庫へと移すのだが、どちらかという私の手は小さく指は短い。ある夏の夜、手を滑らせてビールを一本落としてしまった。ビール瓶が床に落ちて割れると、店長が間髪入れず「はい、店の売値で弁償して」と言った。売値は私の時給よりも高かった。「ああ、阿呆臭い。」ついそんな言葉が私の口から漏れ出てしまった。一瞬にして一時間以上の労働を無駄にしてしまった情けなき、そして仕入れ価格ではなく顧客への提供価格で弁済しなければならぬ事に対する不満が思わず口をついてしまったのだ。それを聞いた店長は、「そうか、阿呆臭いか」とだけ言った。

仮にビールの仕入れ価格を200円、店での提供価格を500円としよう。なぜ200円ではなく、500円弁済しなくてはならないのか。経済学を学ぶうちにその疑問は解消された。私が手を滑らせたことで、本来なら店の収入となるはずだった500円が失われてしまったわけだが、経済学ではそれを機会費用と呼ぶ。つまり私は機会費用でビールを買い取るよう求められたわけだ。

その夜、閉店時間を迎えて帰り支度をしている私を店長が呼び止めた。「この先の角に自動販売機があるから毎ビールを2本買ってきてくれ。一緒に飲もう。」そう言っただけで百円玉を数枚私の手に握らせた。働き詰めで疲れた夏の夜、客のいない静かな店で店長と二人で立ち飲みした毎ビールはこの上なく旨かったことを覚えている。「お疲れ様」と一言、

後は黙ってビールを飲む店長の横に立って、未熟者の私は何かを学びとろうとした。兎に角今はただ黙ってこの人から、この経験から何かを学ばなくてはならないのだと。その日の経験が機会費用という経済学の概念と結びついたのはずっと後になってからの事だった。

今改めて思う。師も経済学も至る所にあり。どんな事からでも何かを学びとろうとする自分の意思ひとつで、日々の些末な出来事が大学の講義や教科書を通じた学びに生命を吹き込んでくれる事もあれば、何気ない日々の出来事に授業で学んだ経済学の視点が大きな意味付けをしてくれる事もある。一見接点の無さそうな両者を結び付ける事ができるのは、大学の先生でもバイト先の店長でもない。自分自身だけなのだ。■